鹿屋・大隅の活性化について

【田野邉】 全国で事業をやっているが、鹿児島・鹿屋は他県等と比べて閉鎖的。事業をやるにしても制約が多い気がする。

㈱住宅性能評価センター
代表取締役社長
田野邉 幸裕さん

【米重】 「健康のまちづくり」を提案したい。例えば、10分で1㎞のウォーキングを推進してはどうか。鹿屋は田舎なのに安全に歩く場所がない（東京のような歩道がない）ので、例えば輝北の上場公園に1周1㎞のコースを作って、安全にウォーキングしてもらい、景色も楽しんでもらうのはどうか。

拓殖大学
准教授
米重 修一さん

【米倉】 魅力はたくさんあるが、うまく情報発信ができていない。産業がないと移住定住の促進ができないと思う。

Tokyo

東京

7月29日、東京都内で関東在住の市にゆかりのある12人の方と中西市長との意見交換を行いました。
会では中西市長が「これまでも地方の自治体においては、地方の活性化に取り組んできましたが、人口が減少する中でなかなか効果的な政策が打ち出せていないのも事実です。ぜひ鹿屋を離れた皆さんに外から見た目で鹿屋の売りや課題について意見をいただければ」と挨拶しました。
出席者からの主な意見は次のとおりです。

日本マイクロソフト㈱
シニア・アカウントマネージャー
米倉 寛子さん

【前田】 鹿屋の特産物を聞かれても答えられない。ブランド化されたものがないので、「鹿屋の黒豚」などでブランド化を図って大々的にコマーシャルすべき。

経産省 航空機武器宇宙産業課
係長
宮内 光弘さん

【宮園】 文化面について、鹿児島にこだわって地元で頑張っている音楽家もいるが、あまり評価されていないのが残念。

㈱ロックス
代表取締役
中島 一郎さん

【宮内】 産業振興については、今ある産業の収益力をどう伸ばしていくか、ベンチャーを含めた企業誘致ということになると思う。

【中島】 集客力の高いイベントとリンクしてPRした方が効率的。

【永山】 人を呼び込むためには、ブランドと強いメッセージ性が必要。

一般社団法人 移住・交流推進機構
総括参事
後藤 千夏子さん

【後藤】 移住施策は、若者・子育て世代にターゲットを絞っている自治体がほとんど。移住施策の柱は①情報発信、②仕事の紹介・マッチング、③地元の受け入れ意識の醸成、の3つ。どこの自治体も良いパンフレット、ホームページを作ってPRしているが、それだけではダメ。広く呼びかけるのではなく、ターゲットを絞ってやるべき。また、地元に残っている両親に就職情報を送るのも有効。

アートスペース羅針盤
代表取締役
岡崎 こゆさん

【岡崎】 IT企業やデザイナーなどを誘致できないか。インフラさえ整っていれば、田舎でも仕事はできる。

【宮内】 雑誌「るるぶ」で鹿児島県の観光地ランキングを見たが、50位以内に大隅が入っていない。

鹿屋でブランディングできるものは？

【米倉】 ふるさと納税に関して、鹿屋の両親を通じてアプローチしてみてはどうか。また、英語特区などを生かして、教育や子育てをブランド化・差別化すれば、若い世代・子育て世代には良いアピールになると思う。

【田野邉】 観光で来ても食べ物を紹介してくれるところがない。食に関して、一つに特化するよりも、総合力でPRした方がいいのではないか。また、吾平山上陵は大隅の宝。もっとアピールすべき。

ジェットスターグループ
マーケティング&PR本部長
永山 健作さん

【永山】 ブランドの考え方に「価格と質のバランス」がある。認知度も高めた後、実際行動してもらうためには、「価格と質のバランス」が重要となる。

農水省 食料小売サービス課
課長補佐
松尾 佳典さん

【松尾】 鹿屋は日本でも有数の畜産のまちだと思うが、ブランドイメージはない。もし畜産を売りにするのであれば、鹿屋に行かないと食べられないものを作り、それを食べさせるところを常態化させる必要がある。畜産物はアピール性が高く、成功すると大きいがそれなりの覚悟も必要。

㈱すんくじら本舗
代表取締役
繁昌 忠浩さん

【繁昌】 鹿屋の飲食店には美味しい所がたくさんある。しかし、都市部向けのアプローチの仕方（営業）が下手なので、思ったより評価が得られていない。都城市や鹿児島市などから食べにきてもらう仕掛けも必要。

その他

【後藤】 移住相談イベント等を都市部で実施する場合には、近隣自治体や県との連携も視野に入れて検討すべき。単独では難しい。また、地元企業・農林水産業・商工会・金融機関と連携して、いかに地域に埋もれている求人情報を掘り起こして外に出していくかが重要。また、地元住民とも連携して、地元がどのような人材を求めているか把握すべき。

【松尾】 東京オリンピックまでの5年間は外国人観光客が確実に増えるので、大隅としてどうするのか、そろそろ考えないと対応が間に合わなくなる。

明治大学
学生
宮園 唯さん

【宮園】 教育を全体的に底上げしてほしい。

【繁昌】 豚ばら丼について、各店独自にやるのもいいが、統一性があった方が競争も生まれていいと思う。そのためには、「鹿屋の豚ばら丼はこれでいく」というリーダーシップが必要。丼にすると油っぽいので若い人にはいいが、高齢者にはキツイ。ダシで食べる豚ばら丼なら高齢者も食べられる。

【前田】 地元から外に出て家族を持ったら、なかなか地元に戻れない。いかに地元の若者を定着させるかが大事。また首都圏の活動も市民に紹介して欲しい。

㈱アイシンコーポレーション
代表取締役
前田 義美さん
（関東かのや会 会長）

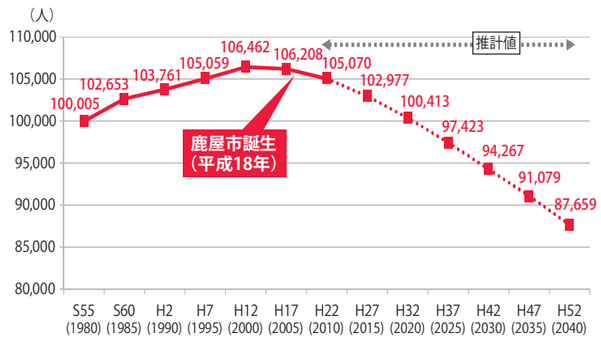
統計から見る鹿屋市の課題①

減り続ける総人口

本市の人口は、平成12年をピークに緩やかな減少傾向となっていますが、このまま推移すれば、平成52年（2040年）には、約8万7千人まで減少すると推計されています。

このまま人口減少が進んだ場合、地域経済の衰退や社会保障制度の維持が困難になるなど、地域に様々な課題を生じさせることが懸念されています。

【総人口の推移と将来推計】



資料：平成22(2010)年までは総務省「国勢調査」
※平成27(2015)年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(H25.3.27公表)」